

余りがないので割り当ては苦痛だった。

労工要員・担架要員はどこへ行くのか日数もはっきりしないことが多い。

あふれる邦人を減らすため、五月ごろ寛甸方面へ農耕移民の募集があった。二千人近くの連中はどうなっただろうか。行く機会をつかまえ奉天方面へ逃亡すればよいとの冗談も出たが。

看護婦要員は非情だった。場所や日数も言わない。行ける境遇の独身女性がいる間はまだしも、仮装結婚も現れ、そういうことができない娘を持つ親御さんにとっては何となく苛酷で、本人も悲壮、恐怖ですらある。「〈鬼〉とののしられた。また、〈姉ちゃんを連れに来たア。〉と、泣いて妹が逃げ走るさまに、足がすくんでしまった。」と、実際に対面説得する立場にあった班あるいは組長はつらかったろう。

二班の市川班長が、自分から進んで労工に参加し瘦せて戻った。看護婦要員に二班の浜本組長が妹を、四班の近藤班長が娘を出した。順番になったからといって。

また、拳銃が出てきて届けたら、なぜ今までわからな

かったのかと、近所の男性全部と組長が市政府に出頭させられ一室に一日中閉じ込められ、暗くなってから帰されてきた。七班の辻班長は、私が雪の朝捕まる時たまたま来合わせていて、同居の男と二人が数珠繋ぎにされて四日間ぶち込まれた。家族は命が危ないと心配していた。日僑管理員の仕事は重大だった。

私は、街長が〈好人〉なので助かったことしばしば。人の供出には時に危険の度合いを尋ね、いわゆる満額で出す場合あり、逆に少数しか連れていけない仕訳をした。区公所が近いことも役立って集合状況の情報をとりつつ、時間切れすれすれの離れ技も演ずることができた。

孤兒と墓標式百五十柱

福岡県 江頭 ふみ子

私の亡夫は生前の名前を野島達夫と申します。満州国協和会撫順県本部事務長の要職にありました。終戦の年の五月、応召入隊と殆ど同じに中央本部より召集解除の

通知を出していただいたのですが、そのまま帰らぬ人となってしまうことが引き揚げて分かりました。

昭和二十年八月十五日、天皇陛下の御詔勅と同時に全満同胞に対して、「日本人の生命財産は守る。」とラジオからしきりに呼びかけた言葉は、全くのウソでしかありませんでした。

それから間もなく、ソ連の戦車隊が南を目指して進入との噂におびえている矢先に、残っている男子は盲目でも足が不自由な者でも、壕を掘りに出てくるように呼び声が聞こえました。またその後、人手が足りぬ、女子も若い者も皆出勤せよと呼び声が聞こえ、もんぺ姿にスコップを持った人々が走って行きます。それを追いかけるように、隣組からは青酸加里入りの角砂糖が配られてきました。万一の場合、辱めを受けぬうちに全員サイレンを合図に食べるように……。

テーブルの上に角砂糖を置く手がカタカタと震えました。サイレンを待つ間の恐ろしさ子供たちをしっかり両手に抱きかかえながら、何とか母と子供たちを逃がす方法はないかと考えているうちに何時しか時がたち、とう

とうサイレンは鳴りませんでした。

不安な幾日かが過ぎたある夜中、何とも知れぬどよめきがウォーッという叫び声に混じって、何かを激しくたたく音、ガラス窓をたたき割る音、悲鳴、努号がだんだん家の方へ近づいてきます。子供たちは、「母さん何？こわいよ、こわいよ。」と、すがりついてくるのを素早く身仕度をさせて、天井の屋根裏に逃げました。寒さにふるえる子供たちをしっかり毛布にくるんではいますが、八月も半ば過ぎの満州の夜は冷えびえと寒さを感じます。

しらじらと明けそめたらしい外の気配にそっとのぞき見ると、静かになった町の様子は不気味にひっそりと静まっておりました。下に下りた途端、腰がふらふらとなるのを覚えアッと驚く有様でした。ガラス戸は全部割られ、六十畳の畳は全部はがれ、床板まで持っていかれました。

泣いてはおれませんでした。残された協和会の夫人たちを励ましながら、今夜からの寝ぐらを捜さねばなりませんでした。幸いセメント会社の寮に叔母が交渉してくれましたので、六畳三部屋に十家族、女子供ばかり三

十六人が抱きあうようにして幾日かが過ぎました。地獄の生活でした。水もなくガスもなく、金もなく、満鉄社宅で何の不満もなく暮らす友だちに借金を申し入れても、返す当てのない申し込みに友人とて決していい顔はしてくれません。だんだん子供たちの顔が無表情になり、青ざめてきました。皆で、青酸加里の角砂糖をと心でうなずき合うことが多くなりました。

でも、だれかがつぶやきました。主人たちが帰ってきただらどうするの？涙を浮かべた顔が「うん、うん。」とうなずきます。

九月にもなるともう寒さが身にこたえるようになりませんが、そのころから、北滿・北鮮からの難民の人たちが撫順へ撫順へと逃れてこられます。子供と思ひ込んでぼろ包みをしつかりと胸に抱いてトボトボ歩いてくる母親。死んだ子を背負った母親。うつろな日には涙もかれ果てた母親。顔はあかによごれ、着物は臭く、縫い目という縫い目にはシラミの行列です。子供もまた同じでした。栄養失調の子供は青白く水ぶくれの顔で、手足は骨と皮だけのようになり、くるぶしだけが異状に太く見えます。

撫順の人々は立ち上がりました。難民の人々を迎え居留民会が発足いたしました。早速炊きだしにかかりました。国民政府軍に泣きついて興農合作社に高粱米の供出を願いました。これは満州国の後始末だといって、腐りかけた高粱米が届きました。貧すれば鈍すると昔の人はよく言ったものです。

私はセメントの寮に移ってから、長女一歳、次男四歳が悪性ハシカに倒れました。薬もなく医者も戦地にかり出されて一人もおらず、ただ民間薬だけが頼りの毎日でしたが、看病の甲斐なく長女順子を亡くしてしまいました。身も世もなくとはこのことだろうと思われるくらい一人泣き明かしました。

いとし子よ荒ら道こゆるよみの国 旅やすかれとただ祈るのみ

悲しみに暮らすある日、主人の新しい満人の友、楊先生が尋ねていらしてくださいました。世界紅万字会の撫順滋濟院長でした。「太々、悲しみは喜びに替えることができます。それはあなたの心一つです。帰ってこられる野島先生のためにも、あなたがべそをかいてはいけま

せんよ。」と、肩を大きな手でしっかり押さえてくださいました。そして、「難民の孤児を救いましょう。このままでは子供たちは皆死んでしまう。順子のようにしてはいけない。」と言われました。

それからの私は変わりました。何もかも忘れて孤児のために尽くそうと決心いたしました。孤児院の接収に、院長と二人で国民政府の高官に接収方をお願いに行きました。梁という政府軍の高官でしたが私に握手を求め、大変勇気ある女性だとおほめの言葉をいただき、その場で撫順の一番大きい山陽楼という料亭を接収してもらいました。子供たちのための衣類、器、玩具等供出をしていただくため、日本人の家庭をお願いして回りました。快くお金まで出してくださる方、戸の向こうから冗談じゃありませんよとどなる人。人間の真価は逆境に立って初めて分かるものだと、人間の一番大切なものを見つけた思いでした。

供出していただいた品物の肩にくい入る痛さも忘れて、毎日毎日歩き回りました。時期はもう十月の極寒期に入りかけており、荒れずさぶ雪の中涙が流れてやまぬこと

もありました。夜はいただいた衣類の再生や補修と、十人の保母さんを相手に夜更けまでミシンを踏みました。

いよいよ十一月の初め、各地の収容所から子供たちの来る口です。保母さんには三か所のお風呂を沸かして三人当てに待機させ、私は玄関にバリカンを持って待ちました。トロンとしたまなざし、赤茶けた髪がべったり頭皮にへばりついて、その中を何千とも何万ともつかぬシラムィがうごめいている様はまさに生地獄と思いました。「よく来たわね。もう大丈夫よ。」と泣きながら言う私を、子供たちはジロリと見てふてくされたように見えました。なぜか私は分かりませんでした。

バリカンで丸坊主にした子供の着物をはぐようにして脱がせ、保母さんが風呂に連れていき三回湯に入れてもまだシラムィが肌に食いついていると保母さんが腹を立てる始末です。

こうして、来る日も来る日も孤児は来しました。最後私の二人の息子を入れて四百八十九人。十一月中旬まで収容にかかりました。紅万字会から供出していただいた夜具、食糧だけでは、なかなか思うように子供たちを満足

させられません。

そこでまた、私は精一杯の愛想をふるって国民軍の高官を尋ねました。栄養失調の子供に米のおかゆをやりたいと頼みました。彼は快く、病気の子供には白米を元気の子には餅粟を出すことを約束してくれ、その上、私の主人が大株主である日満デパートも接収して五十万の軍票をいただくことに成功し、意気揚々と引き上げて帰りました。それはよかったです。孤児院に帰ると二人の子供が発熱で倒れ保母さんがおろおろしているところでした。

孤児の赤痢が感染したのですが、そのころは女学校の上級生が小児科医として病院を再開しておられ、孤児たちを無料で診ていただいておりますので、無事に快復することができましたが、亡くなった孤児は二百五十人にのぼりました。

婦国命令が出ました昭和二十一年五月五日までに裏山の墓地に立てた墓標の数は二百五十柱。今も日に浮かぶ真っ白な白木の墓標は今もあそこの裏山の林の中に立っているのでしょうか。

今日も又みなし子は逝きぬ雪の日に 白き墓標の数を
ましつ

昭和二十一年五月五日、朝から降りだしたみぞれの中を、楊院長、紅万字会職員に見送られて滋濟院を後にした私たち一行は、保母、炊事婦、孤児を入れて二百四十五人だったと覚えていますが。それに満鉄の青年隊十人、民会より二人です。撫順の駅から無蓋車に乗せられ、途中暴徒に襲われては持っている物を剥がれ、雨が降っては頭からびしょ濡れになって、ようやくコロ島に着いた時は地獄で仏に会った気持ちでございました。

コロ島から乗った船は日本高等商船学校の練習船日本丸でした。生徒さんの、言葉に出せぬほどの美しくりりしかったことは今も日に焼きついております。船の中では子供たちに生徒さんが代わる代わる『リンゴの唄』を教えてくださいました。幸せを胸に一杯に運んで来るようなあのリンゴの唄は、一生忘れることのない思い出の唄となりました。

昭和二十一年六月十四日博多港着。

生活の苦しさ、帰らぬ主人の事許り思ひなやんだ昔

が、かわいそうでなりません。七十歳を過ぎた現在も、思ひは遠く満州へ走ります。

撫順の思い出

静岡県 辻 フサコ

昭和十四年四月に満州の撫順に親戚を頼りに渡満致しました。縁あって満鉄の建設業をしている人と結婚しましたのが十六年で、十八年に長女が生まれ何不自由なく生活していました。其の内戦が激しくなり二十年五月末に主人は応召が来て吉林方面に行きました。八月に終戦となり其のまま消息が分かりませんでした。私達親子は其れから毎日つらい日が始まりました。満人部落なので日本人が少く暴動が始まりそうなので五里程離れた町に姉が住んでいる社宅が有りますので、そこへ何も持たずに二歳の子を連れ逃げ延びた。後で耳にしたのですが、私達が家を出た其の日に家中荒され、何も残らず持ち去

られたそうです。私達母子は本当の無一文の着たきり雀になりました。二十一年に、そろそろ内地引揚開始を耳にしたので、申込をして七月十日に撫順を出る事が確定したのでリュックの用意するのに一カ月程かかりました。長いヒモを作り、それに子供の体を結びその端で私の体を結び、リュックを背負い両手に色々提げ、リュックの横にヤカン、ナベをぶらさげ今、思い出せば本当に乞食の団体旅行でした。広場で荷物の検査が有り注射が済み、いよいよ歴史旅行が続けられたのです。第一に驚いた事は無蓋車に乗せられた事です。いつ日本に着くか分からぬ旅で本当に心細い複雑な毎日でした。十日程飲物に困りながら、やっとコロ島より大久丸に乗り込む事が出来ました。が、それから又、毎日、青々とした海の上を六日程ゆられながら玄海灘を通る時、荒波を見て子供が山が山がと口ばした時には私は一瞬この子を道連れに飛び込んで死のうと思いました。でも其の時、ふと頭に浮かんだ事は姉達と別れる時に荷物は取られても子供だけは未だ見ぬ日本の地を、ふませてやるのだよ、これこそ一番のお土産だよと云われた事を思い出し強い気持